



能古博物館だより



好評の**特別企画展** 閉幕 4月から**常設展**へ移行
 8ヶ月間で1、578名来館 1日の最高53名!

理事長兼館長 原 寛

春4月―。サクラ色に染まった能古博物館は新年度のスタートを切りました。昨年度の1年間を「海の博物館」に変貌する誕生日とするなら、本年度は、よちよち歩きを始めた乳児期にも例えられましょう。

昨年8月1日に開幕した開館20周年記念特別企画展は記録的な酷暑で滑り出しは不振の日々でした。しかし秋口から持ち直し、11月1日(土)には来館者53名を記録しました。また冬季休館を返上、年度末まで会期を延長した努力が報われ、3月29日(日)の最終日には25名が来館、フィナーレを飾りました。

8ヶ月間の入場者は1、578名(うち無料456名)に達しました。この4月から展示の内容を一部変更して常設展に移行しました。引き続きほぼ同じ内容でご覧いただけます。

昨年度は日本財団の助成対象事業として ①小冊子「博多湾物語」1万部の発行 ②木造和船の建造 ③五力浦廻船クルーズの開催 ④大型ジオラマの製作展示 ⑤樋口恵子先生の講演会開催の5事業を実施いたしました。



原 寛

また自主事業として、開館

20周年記念特別企画展「能古島発・博多湾物語」蒙古襲来からサザエさんまで」を開催。特別展に先立ち館内の改装工事を行い、「海の部屋」を新設しました。

今年2月には97歳の文化勲章受章者日野原重明先生を迎えて「命の授業」を開催いたしました。

3月3日に大型ジオラマを「海の部屋」に搬入して予定した全ての事業を終えました。ジオラマはテーブル型のケースに収め、周囲には木製の椅子10脚を置いています。博物館の新しい「目玉」です。

目の前に広がる博多湾の歴史をジオラマで確かめ、「博多湾物語」に思いを馳せてください。

今回の一連の事業ではサポーターズクラブをはじめ多数のボランティアの皆さんに助勢していただきました。仲間として大変嬉しく思っております。敷地内に咲き誇るサクラは20周年記念事業を無事に終えた喜色にも似て、私には希望の色に思えてなりません。能古博物館もこのサクラの花のように市民に愛される存在でありたいと願っております。

水彩画「博物館の四季」
 サポーターズクラブ
 伊藤公夫さんの作品

ようこそ「海の部屋」へ

大型ジオラマを製作した福岡市西区の市立北崎中学校長渡辺彰さんが3月29日、能古博物館を夫人と共に訪れ、「海の部屋」に展示された自作と対面した。「やーっ、立派な台を作ってもらいましたね。」と笑顔の渡辺さん。縦229センチ、横290センチ、高さ70センチのテーブル型。九州木材工業(八女市)が製作した。椅子は大川市の家具デザイナーが背当ての材質を変えて「遊び心」を演出した。マホガニー、とち(枋)、かりん、せん(栓)、くす(楠)、なら(檜)、メープル(楓)、けやき、ホワイトアッシュ、ヨーロッパなど。10種類の樹名が焼き入れてある。



能古小学校の先生たちがジオラマの見学に訪れた。製作者の渡辺さんはかつて能古中に教頭として勤務した。
 3月30日



自作のジオラマを前にした渡辺彰さん(右)と夫人。
 3月29日



館内で一番眺めのよい第3展示室をくつろぎの場「海の部屋」にリニューアルした。



椅子には樹種の焼き印



日本財団のマーク

「海の部屋」の上手な利用法

例えばこんな使い方はどうだろう。漫画家の森田拳次さんが博多湾物語をイメージして描いたイラスト6点を観た後、博多湾のおへソ能古島を真ん中に置いた大型ジオラマを囲んでおしゃべりを楽しむ。木製のテーブルと椅子は特注品、座り心地を頼めばコーヒーや島特産のサイダーが任意の「醸し金」で飲める――。



10人前後の小グループの集い、サロン形式の作品展示にも使え、ひとり400円の入館料程度で利用出来る。

詳しくは博物館事務室(092-883-2887)まで。



大型ジオラマの搬入、組立て作業 =3月3日=



吉田市長=前列中央=を囲んで「海の部屋」で記念撮影

吉田市長が視察 1月24日、予定されながら急な公務のため二度延期された吉田宏福岡市長の視察がやっと実現した。一行は原館長、毛戸、黒田両理事らの案内で本館と別館を回り、開催中の特別企画展を觀賞した。

「海の部屋」では館長が20周年事業の狙いを資料をもとに説明、民間博物館経営の難しさを言外ににじませた。1時間余のなごやかな視察だった。

ヨットの牛島竜介さん来館 昨年11月12日、芦屋市の女性アパレル会社社長牛島竜介さん(64歳)が福岡市内で開いた春物展示会の機会に来館、自身の太平洋単独往復航海と、単独世界一周航海の資料、写真などを熱心に見て回った。牛島さんは世界一周の航海日誌を出品した。日誌は阪神淡路大震災で一時期行方不明になっていたが、当館の提供依頼をきっかけに見つかった。

また福岡市南区に住む牛島さんの母親弘子

さん(86歳)も昨年夏、友人と来館。「息子のやったことが再び陽の目を見たのが、うれしくてたまらない。出来ればいつまでも展示してほしい。」と話した。



本館前の牛島竜介さん



「海の部屋」から対岸の百道浜を眺める日野原重明先生と原館長。日野原先生は「命の授業」のため来館した。生け花は近所に住むボランティア石橋テルヨさんが館の庭に咲く紅白の梅を活けた。 2月14日

貴重な資料ぞくぞく 特別企画展で特に目を引いたのは、ロビーに展示した若き日の長谷川町子さんの大型ポルトレートだろ

う。西日本新聞社の資料部に永年眠っていたのを昨年春、関係者が見つけ、同社の好意ある計らいで初めて公開された。昭和二十年代はじめの撮影と思われるが、ペンをとって「サザエさん」を描く町子さんの服装はあか抜けしていて、敗戦直後の物資不足を感じさせない。

別館1階には、単独世界一周ヨット「銀狐号」の牛島竜介さんが航海中に使用した霧笛、六分儀、海図、セール(帆)など貴重な資料が展示された。いずれも母親の弘子さんが自宅に永年保管していた。

また、遠隔シャッターが切れるように工夫された防水カメラは千葉県に住む元朝日新聞写真部員小野崎徹さん(68歳)が提供した。



霧笛を持つ小野崎さん



若き日の長谷川町子さん

お 礼

開館20周年事業を遂行するに当たり格別のご協力をいただいた日本財団をはじめ、地元の方々、福岡市、同西区、同早良区、新老人の会本部(東京)、同九州支部など関係諸団体の皆様に対し改めて深く感謝申し上げます。

平成21年4月

財団法人亀陽文庫 能古博物館

金印のあれこれ話(その二)

郷土史家 岡本 顕実 (写真も)



志賀島から出土した金印は調べれば調べるほど謎とミステリーに包まれている。その謎は大別して二つ。一つは出土状況を巡る謎、もう一つは金印そのものがはらむ謎(例えば金印ニセモノ説等)である。今回は前者にスポットを当てて見てみよう。

理解を早めるために、金印発見の一般知識を5W1Hの要領で確認しておきたい。

いつ 天明4年(1784)2月23日

どこで 志賀島の叶の崎(カナノサキ)

誰が 発見者は百姓の甚兵衛

何を 金印(『漢委奴国王』印)

なぜ 田んぼの溝の修理で

どのように 大きな石を除いたら金印出土

以上が常識的な出土状況だが、このうち「何を(金印)」以外は全部、疑わしい(後述)。この状況は発見者の甚兵衛が役所に報告した口上書による。金印は人を介して、高名な学者で

後漢書倭伝の「金印」下賜の記事(原文)

謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升

のれこのた力
土触伝の印し眼
出に倭だ金定の
志賀島これ鑑冥
金印の漢書から
た後漢記事自井
記記事記出亀す

衛は島外へ去った？
だが、金印発見から25年後の火事だ。「甚兵衛」とはいえ、別人か。
一方、金印発見者は別人という資料が2点ある。博多聖福寺の住職で、

掘調査を行ったが、何らの遺構、遺物も見つからなかった。500メートルほど北の「叶ノ浜」なのではないか？平成6年、福岡市教委が発掘したが空振りだった。

あり黒田藩校『甘棠館』の館長であった亀井南冥に届けられ鑑定が依頼された。南冥は時日も要さず結論を出した。この金印は、建武中元二年(西暦57年)、「倭奴国、貢を奉り朝賀す。光武賜うに印綬を以てす」との記述が中国の史書『後漢書』倭伝にあるが、この件の印そのものであると南冥は看破した。おそろべき炯眼である。当時から1700年以上も前の出来事を記した「印綬(印と、通し紐の綬)」の二文字から志賀島出土の眼前の小さな金印がそれであると読み解いたのである。容易なことではない。

金印出土のニュースは全国に伝わり、反響の大きさに驚いた藩は金印を藩庫に収め、かわりに甚兵衛に白銀5枚を賜った。

謎だらけ 金印発見の周辺

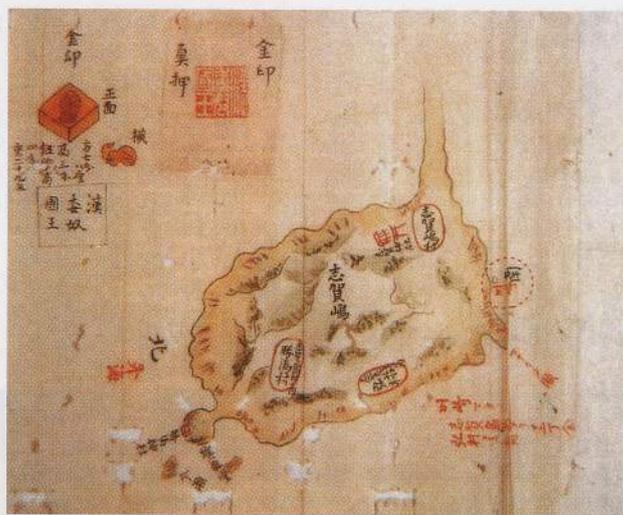
志賀島の金印発見から今年で225年。謎は一向に解けないどころか深まるばかりだ。

謎1 発見者の甚兵衛は実在したのか？

藩の公文書に甚兵衛の名が庄屋等と共に書きとめられているが、金印発見の6年後の島の『田畑名寄帳』(農民の土地台帳)に彼の名はない。寺の過去帳にも見当らない。ところが、地元「甚兵衛火事」という伝承がある。文化6年、村で110戸が焼けた。火元の甚兵衛は島外へ去った？

謎2 出土地点はどこか？

禅画で有名な仙厓和尚の小幅に「天明四年丙辰 秀治と喜平が掘出す」とある。だが、この年の干支は丙辰ではない。甲辰で間違いだ(小幅はニセモノ?)。双方、決定打を欠く。



亀井南冥は金印をいち早く正しく鑑定すると共に、自ら絵図で出土地点を示す。右端の丸い点線内に「叶崎」の書き込みがある。現在の金印公園があるあたりだ。

甚兵衛口上書では「叶の崎」となっている。現在の金印公園の辺りだ。文献上は間違いなく、古絵図でも「カナノサキ 金印出」とあるが、現地は急な山が海に落ちる地形で、とても水田の適地と思えない。早くは大正2年、さらに昭和48年、同60年と九州大学や福岡市教委などが発掘調査を行ったが、何らの遺構、遺物も見つからなかった。500メートルほど北の「叶ノ浜」なのではないか？平成6年、福岡市教委が発掘したが空振りだった。



福岡市が整備した金印公園。海岸際に道路が走り、比高差5m。金印碑(石柱)の辺りに江戸期、わずかな水田があったが...。海峡を隔てて能古島。

謎3 最大の謎は「なぜ志賀島から?」

この金印は「奴国王に下賜されたもの」というのが定説だが、奴国の王都は志賀島から南東に22キロも離れた春日市の須玖岡本遺跡。後漢から王侯クラスの処遇の証明として賜わった破格の金印を、なぜ遠い離島の志賀島に埋納したのか?。弥生期の重要な遺跡では、ほとんど例外なく銅鏡や銅剣、鉄剣などが副葬品として出土するのに、志賀島の金印出土の場合、少なくともこれまでの情報(発掘調査も含め)では何らの副葬品も無く、金印1個がまるで投げ棄てられたように石の下にあった。これは遺跡の性格をどう見るか——と絡む論点だ。そこで発見当初から「遺棄説」、「隠匿説」——安徳天皇が壇の浦から筑前に逃げて来た——、さらに

「漂着説」などがあり、明治に入ると「奴国王の墳墓説」が出た。大正では中山平次郎の「奴国の没落による金印の隠匿施設」説、笠井新也の「奴国王墓説」が論争の火花を散らした。

昭和後半では水野祐の「志賀海神社の磐座説」——祭祀遺跡——、森貞次郎の「埋納遺構説」——航海安全を祈願した祭祀遺跡——とする見方が有力視されているが、反論も多い。

最近の新説に「玄界灘の海人集団の首長墓であった」というのがある。福岡市教委で永年、発掘調査を担当して来た塩屋勝利氏だ。その理由に①百姓甚兵衛が見つけた墓の説明が、玄界灘に多い積石塚古墳の構造に良く似る②海人集団は金印を後楯に朝鮮や中国に渡った——をあげる。だが、これも仮説の域を出ない。

甚兵衛のほうびは本当は大金50両?!

最後にミステリーじみた二話。金印を発見した甚兵衛に藩は「白銀5枚」を賜った、と前に書いたが、本当は「白金50両」という大金だったようだ。藩の側小姓、梶原景照は金印に魅せられ藩庫に入り、測ったり資料を閲覧し『金印考文』を書き、同書にそのことを記している。ところが、甚兵衛口上書が収められている後世の『筑前国統風土記(附録)』では白銀5枚に。さらに時代が下る『黒田新統家譜』ではなんと「銀子若干」に減っている。同じ黒田藩の公式記録でありながら、どうしてこうも違うのか。発見の経緯に不明朗なことが発覚して藩は外聞をはばかったのかもしれない。

(元毎日新聞記者)

船大工東野秋夫さん逝く

能古博物館の依頼で木造の和船「新生虎幸丸」を建造した福岡市城南区の船大工東野秋夫さん。写真は、4月6日肺がんのため市内の病院で亡くなった。享年76歳。葬儀は8日に行われ、原館長が次の弔辞(代読)を捧げた。

東野秋夫さん、このように早くあなたとお別れのとかがこようとは、人生はまことに無常です。ご子息貢様を通して、あなたに木造の和船を作って頂けないかと、お願いしたのは、昨年春のことでした。そして6月4日に着工、8月29日に進水しました。

船には「新生虎幸丸」という、島にゆかりの名前がつけられ、あなたが育った能古島の海岸で盛大な進水式を行いました。(中略)

しかし、肝心のあなたは体調を崩して式に欠席されました。晴れ姿を見る機会が失われたことを、いまさらながら残念に思います。

東野さん、あなたが精魂を込めて作った「新生虎幸丸」は私どもの能古博物館のロビーに飾られ、あなたが残した素晴らしい技術は多くの来館者を楽しませています。

あなたと能古博物館とのご縁はまだ続きます。そして島の方々は、あなたを誇りに思うことでしょう。

どうか、やすらかにやすみください。

平成21年4月8日

財団法人亀陽文庫 能古博物館

館長 原 寛(代読)



連続ヒット！ 大型事業

総力挙げ2、3月に連続開催

ともに満席、光った企画力

年度末を控えた今年2月14日と3月14日の2回、締めの大企業企画が登場した。

▽日野原重明先生の「命の授業」

▽樋口恵子先生の講演会「サザエさんからいじわるばあさんへ」〜長寿時代と女性たち〜

命の授業

地元の能古小学校(樗木昭寿校長・全校児童75名)において、4年生以上の児童と保護者に呼びかけた。休日の土曜日の開催とあって島外から通学する児童の参加が危ぶまれたが、島に住む博物館友の会女性会員(78歳)の熱心な働きかけで、公民館、養護施設、西区役所などからの参加を含め、会場の博物館1階「日野原ホール」(旧研修室)は満員の盛況。心配された天候も昼前には回復した。

イチローは？ 日野原節は子どもたちのハートをとらえたにちがいない。男子をイチローに見立て、いきなり右投げの投球

モーション。そして「イチローはこうやって打つのです」と片足で立ってみせた。年齢差が85

歳以上もある超老人の野球への情熱に子ども



日野原さんの指揮で歌う児童たち—福岡市西区能古で

能古小児童らに 日野原さん授業

97歳の現役内科医で、「生き方上手」などの著作で知られる聖路加国際病院理事長の日野原重明さん(97)が14日、福岡市西区の能古島を訪れ、命の尊さを伝える「いのちの授業」をした。会場の能古博物館では能古小の4、6年生約30人をはじめ、保護者ら約60人が耳を傾けた。

日野原さんは冒頭、子どもたちに聴診器を渡し、自分の心音を聴かせた。続けて

みなさんの時間 どう使うかがいのち

2月16日付け・朝日新聞朝刊

「いのちはどこにあるの？」と問い、「心臓イコール命とは考えられない。心臓は酸素や栄養を持った血液を脳や手足に送るポンプ」と説明した。

サン・テグジュペリの「星の王子さま」を引き合いに、「本当に大切なものは目に見えないものが多い」と説き、「みなさんが持っている時間をどう使うかがいのち」と語りかけた。

さらに「今は食べたり、遊んだり、自分のためにいのちを使っていい。でも、大き

くなったら、自分の使える時間を何か自分以外のために使わないといけない」と話した。日野原さんは87年に母校の神戸市立諏訪山小で「いのち」についての最初の授業をした。米国や豪州、メキシコ、台湾などでは英語で語りかけた。最近では週に1度は続け、これまでに130校に行った授業は全国で約130校になるとい



聴診器で初めて心音を聞く子どもたち

サザエさんからいじわるばあさんへ ～長寿時代と女性たち～

奮闘！初の島外進出

知名度の低さが能古博物館の泣きどころ。開館して20年を数えるのにその存在感は希薄だ。樋口恵子先生の講演会は初の島外進出、PRの好機だった。

「応援団になってください」

友の会入会を積極PR

積極的に打って出ようと仕掛けたのが、ピーでの友の会入会勧誘と物品販売、幕間の映像放映。少ないスタッフが休憩時間を利用してフル回転した。キャッチコピーは「応援団になってください」。

「生活大事にする視点を」

樋口恵子さん
早良区で講演

評論家で東京家政大学名誉教授の樋口恵子さんの講演会が十四日、福岡市早良区百道のももちパレスであった。同市西区の能古博物館が開館二十周年を記念して開催。約八百人が軽妙な語り口に耳を傾けた。

漫画「サザエさん」の研究に長年取り組む樋口さんは「サザエさんからいじわるばあさんへ」と

題して講演。三世代が同居するサザエさん一家の家族関係や地域とのかかわり方を解説しながら、「経済を立て直そう、という今の時代だからこそ、生活を大事にする視点を大切にして男女が一緒に地域をつくっていい」と語り掛けた。

また漫画の者、故長谷川町子さんが岡市内に住んでいたことも触れ、「多済を望みならサザエさんが生まれたことを福岡市民は誇りにしてほしい」と話した。

3月15日付け・西日本新聞朝刊

はあさんへ～長寿社会と女性たち～

日本財団 助成事業



「(サザエさんをモデルに)男女が一緒に地域をつくろう。」

が担当、映像は中年の男性サポーター2名が8分間の映像制作から放映までを一手に引き受けた。案内役は当日の司会者福山智美さん。「応援団になってください」とソフトに訴えた。

当日7名、さらに18名申し込み

成果は予想を上回り、友の会の入会申し込みは当日7名、4月中旬までに郵送で届いた分が18名の計25名にのぼった。10年分一括の払い込みや、「頑張ってください。」とのコメントが付いたものもあった。

司会の福山さんは謝礼を辞退して協賛会に入会、絵葉書セットを購入して、スタッフを感激させた。

チラシ1万5千枚を配布 会場の県営「ももちパレス」(福岡市早良区百道)の大ホールは定員800席。共催の早良区役所(荒瀬泰子区長)と協議して、チラシの大量配布を行った。用意したチラシ1万5千枚、A1版の大型ポスター、100枚。

ボランティアの底力 最大の懸案は参加申し込みFAXの受け付けだった。主催の立場から博物館が一手に引き受けた。天神分室を拠点に2月1日から正式受け付けを開始、26日に満席に達した。危惧した苦情も数件だけ。陣頭指揮に当たった柏木理事は「幸運としかいえない」と語った。

成功の裏には鮮やかなチームプレーがあった。女性ボランティアらが曜日ごとに出勤して作業をリレー。初顔合わせ同士が見事に結束した。

島の人たち 能古島から明石幸能古校区自治協議会会長、三苦進東町内自治会長、西方俊司福岡能古郵便局長らが会場に駆けつけ、約2時間半に及んだ男声合唱と講演を楽しんだ。

オールボーイ合唱団 前座出演の西南シャントウールは平均年齢65歳。西南学院大学のグリーンクラブOBで結成され、根強い人気がある。

飾らない人柄に加え、サザエさん研究家という意外性がうけたようだ。

いぶし銀の男声合唱団とのコラボは「神の配剤」(担当者)とのジョークも。共催した早良区の幹部は「満席になったのは企画力の勝利」とたたえた。



(左から)三苦進、明石幸、西方俊司の各氏。後席右端は荒瀬泰子早良区長



西南シャントウール(指揮・徳永和彦さん)

南冥と鎮西の漢詩人(七)

南冥と亀井少栞

神戸女子大学名誉教授

林田愼之助

最近、能古博物館を訪ねたとき、かねてから依頼していた亀井少栞の『窃窕稿乙亥』の複写本が出来上がっていて、それをはじめてわたしは手にすることができた。

少栞については、広瀬淡窓が『懐旧楼筆記』のなかに、

予亀井家を訪ねし時、先生(昭陽)の女少栞、相見て詩を贈れり。少栞名は友。予福岡に留学せし時年十二歳なり。幼より経史に通じ、詩画を善くし、名誉あり。

此の女長成の後、先生の門人三苦源吾を以て贅婿とする。姓を改めて亀井と称す。源吾も余亦た相識れり。雷首と号す。夫妻何れも文壇に名を得たり。

この筆記によってもわかるように、少栞は十八歳のときに、九歳上の雷首こと三苦源吾を養子として迎えて結婚することになる。少栞は昭陽の長女で、少女時代から祖父南冥と父昭陽の教導によって儒学の教養を身につけ、書画にたいする繊細な美意識を植えつけら

れてきた。

今でも、亀井少栞の菊、竹、梅、蘭を描いた絵といえ、童画めいた仙厓の禅画と並んで人氣が高い。

九州第一の梅

少栞が生まれ育ったのは、現在、能古島に向かう渡船が出ている博多の小さな港町、姫の浜であった。寛政異学の禁で、南冥はすでに隠居し、昭陽は黒田藩士の勤務をかねて、姪の浜で私塾「甘古堂」を経営していた時期であった。

その書塾の学生のなかに広瀬淡窓とともに、三苦源吾、のちに亀井家の養子となつて、少栞と結婚することになった雷首がいた。

亀井南冥は寛政異学の禁で廃黜されるが、それまでは藩費甘棠館の教授であり、藩主の侍医を兼ねていた。彼が修めた漢方医は古医方と呼ばれる医術であったが、それは南冥が父聴因から受け継いで、さらに浪華の永富独嘯庵のもとで磨きをかけたものであった。

昭陽は儒学に専念し、経史の学問をきわめんとしていたので、弟子のなかにあつて、儒医をめざして勉強していた青年三苦源吾に、とりわけ目をかけ、出来ることなら将来、家の医術をつがせたいと思っていた。

少栞も、源吾も、その昭陽の気持ちをしらずつ意識するようになってきていたにちがいない。少栞はものごころつくようになって、源吾青年

が好きになつたのであろう。源吾が先に求愛したのかもしれないが、源吾を受け入れるという意志をはつきりとしめした求愛の歌が今日も残っていて、この漢詩で少栞は世に喧伝されることになる。

九州第一の梅

九州第一の梅

今夜為君開

今夜 君が為に開く

欲知花真意

花の真意を知らんと欲す

三更踏月来

三更に月を踏みて来たれ

九州でいちばん香り高い梅であると、少栞はみずからを喩えて歌い出す。その梅の花が、今夜君のために開くのです。梅の花のほんとうの気持ちを知ろうと思われらば、君は夜更けに、月あかりを踏んで、わたしのところにおいでなさい。

江戸末期の女性としては、実に大胆率直である。近代の歌人と謝野晶子に通じるおおらかな開放的な個性であつたにちがいない。文化十三年(二八一六)の十二月十七日は、少栞が源吾、のちの雷首を養子として迎え入れた祝婚の日となる。

自筆詩集『窃窕稿乙亥』

少栞が編み遺した唯一の自筆本詩集が、福岡市西区今宿の少栞旧居に所蔵されていることを伝えたのは、能古博物館である。今宿にはの

ちにその地で、亀井雷首が医者として自立した旧居があり、そこに今も住まわれている亀井准輔氏の所蔵になるものである。それが、『窃窕稿乙亥』である。

庄野寿人氏が生前、「能古博物館だより」に九回にわたって連載されたものに、「閨秀亀井少榊伝」がある。それによると、『窃窕稿乙亥』は、美濃半紙十七丁に綴じ込まれた三十四頁にわたる詩稿である。内容は七言絶句八十五首、五言絶句一首、五言律詩七首、七言律詩一首、計九十四首の漢詩が書写されていた。各詩に朱点が入っているが、それが少榊自身のものか、他の人の手になるものか、今は定かではないが、少榊独特の美しく適勁な筆勢で記されている。

文化十二年は干支でいえば乙亥の年にあたる。とすれば、『窃窕稿乙亥』は少榊十八歳のときの詩稿である。少榊が十五歳になったとき、父の昭陽が姪の浜の自宅を増築して、少榊のための自室をつくり、その部屋に「窃窕郎」の室号をつけている。それから詩稿名をとったのであろう。窃窕ということばは、中国古代の詩歌集である『詩経』の国風 冒頭にのせる歌からきている。「関々たる雌鳩、河の洲に在り。窃窕たる淑女 君子の好き速」(やわらいで鳴き交わすみさごが、河の中洲にいる。窃窕、たおやかな乙女は、君子の好きつれあいとなるだろう)という詩句からとつてきたもので、たおやかで美しいという意味である。

いかにも少榊にふさわしい室名であった。その『窃窕稿乙亥』のなかから、春の歌二首、夏の歌一首、秋の歌一首、冬の歌一首をとりあげて、少榊のすぐれた詩才を読みとることにしたい。



江春晩望 (『窃窕稿乙亥』)

春の歌「江春晩望」

最初の二首は、「江春晩望」と題した七絶十二首のなかから、とりだしたものである。

古寺疎鐘渡水湾

古寺の疎鐘 水湾を渡り

紫烟偏鎖夕陽山 紫烟偏に鎖す 夕陽

の山

春江如練流光遠 春江練の如く 流光

遠し

一片蒲帆帶月還 一片の蒲帆 月を帯

びて還る

疎鐘、遠くかすかに聞こえてくる古寺の鐘の音が入江の水を渡り、紫色の霞がかば夕陽に映える山の姿を隠そうとしている。春の入江の波はまるで練り絹のように白く輝き、流れゆく光となって遠ざかっていく。やがて一隻の帆船が月を背にしながら入江に戻ってきた。

とりわけ、転結の二句は、鮮やかな描写力をみせている。「一片の蒲帆 月を帯びて還る」の句にいたっては、実に絵画的であり、春の夕暮れどきの入江の光景が、見事に活写されて美しい。

このほかにも、「江春晩望」の七絶のなかから、いかにも少榊ならではの春の詩一首を玩賞に供しよう。

雲繞山腰夕日紅 雲は山腰を繞り 夕

日紅し

梨花如雪舞長風 梨花は雪の如く 長

風に舞う

惜春詩酒何清賞

惜春の詩酒 何ぞ清賞ならん

都在鶯兒百囀中

都ては鶯兒の百囀の中に在り

山童稍去樵歌遠

山童稍く去り 樵歌遠し

三逕無人瘦鶴眠

三逕に人無くして 瘦鶴眠る

芙蓉花発水盈湾

芙蓉の花発きて 水は湾に盈つ

日暮玄猿抱子還

日暮れて玄猿は子を抱いて還る

樹竹吟風天楽動

樹竹は風に吟じ 天は楽動し

坐忘骸骨在人間

坐に忘る 骸骨の人間に在るを

雲は山の中腹をめぐるようにかかり、夕陽が紅く照り映えている。白い梨の花びらがまるで雪のように、遠くから吹き来った風に舞い落ちていく。惜春の情をこめた詩にしる酒にしる、それがどうして春を美しくたたえることになろうか。すべての春の景色は、巢立つたばかりの鶯がしきりにさえずっているなかにこそあるのだ。

ひと雨ざつと降つてきて、涼しくなったが、竹という竹が雨のなかにけむり、紫色の藤棚の下で、水がせんせんと音をたてて流れた。山間の少童がしばらく立ち去ってしまったと、樵歌もしだいに遠ざかっていった。三逕、つまり隠遁者の住居の庭には、人影はなく、ただ瘦せた鶴だけが眠りこけている。

これも転結の二句が利いている。「都」という俗語を使って、巢立つたばかりの鶯のさえずりのなかにこそ、清賞するに値する春の光景のすべてがあると歌い込む手練は、とうてい十八歳の少女のものとは思えない。

夏のひととき、はげしい雨が通りすぎたあとの山居の風景が、みごとにとらえられている。もう花のない藤棚、その下を音をたてて流れる水、樵歌を唱いながら遠ざかっていく山童、隠遁者の庭に暑さのためか、眠りこけている瘦鶴と、漢詩の舞台に登場するものにかかかない面白さがある。

夏の歌「夏日山居」

つぎは、夏の風物詩を一首とりあげる。「夏日山居」と題する七絶のなかの二首である。

一雨涼生万竹烟

一たび雨ふれば涼生

紫籐架下水潺潺

紫籐の架下水は潺々たり

秋の歌「園圃小景」

さて芙蓉の花といえは、秋である。初秋になると、淡紅色や白い五弁の花びらを開かせる美しい花である。その芙蓉を歌い出しに使った、つぎの「園圃小景」と題する七絶一首は、まぎれもなく秋の歌である。

冬の歌「冬山居」

つぎは、「冬の山居(冬山居)」と題する七絶一首である。

万里寒光白日幽

万里の寒光 白日幽なり

芙蓉の花がひらくころになると、水はなみなみと湾に満ち、おりしも日暮れて、黒い親猿が小猿を抱いて山に帰っていく。樹や竹が風に鳴って歌い、天空が楽の音に揺れ動いているようである。そんな環境のなかにいると、自然に骸骨、この身が俗塵の中にあることを忘れてしまう。人間は「じんかん」と読み、俗世間を指す。

とりわけ承句が利いている。「日暮れて玄猿は子を抱いて還る」が実景であったにしろ、夕暮れの光景を歌ったものとしては、旧套を脱して新味がある。

山茶花発窓頭

樵夫被雪簑如鶴

不許王恭誇斃裘

山茶花発く 竹窓の

頭は 樵夫雪を被むり 簑

は鶴の如く 許す王恭の斃裘を誇るを

万里に渡つて寒々とした光がはしり、昼間の太陽もほの暗い。山茶花が竹の植わった窓のあたりで紅い花をつけている。樵夫は真白い雪のつもった簑をつけて、まるで鶴のようである。それにしても、中国晋の時代の美男子王恭が鶴の羽根でつくったかわごころもを着て美しさを誇ったという故事があるが、そんなものを認めざるわけにはいかない。

王恭の故事は『晋書』王恭伝にあるが、『蒙求』という初心者むけに四字成語で中国の故事を解説した書物には、「王恭鶴斃」とある。王恭は姿勢の美しい人であつたらしいが、そのうえ雪の降るなかを鶴斃裘(鶴の羽根でつくったかわごころも)を着て歩いたというおしやれである。少槩はこの中国の故事を結句に象眼して、鶴のように真白い雪のつもった簑を着て働いている樵夫にくらべて、その王恭の美しさを認めるわけにはいかないと、拒否する現実感覚のほげしさを、持ち合わせていた。

少槩また老いたり

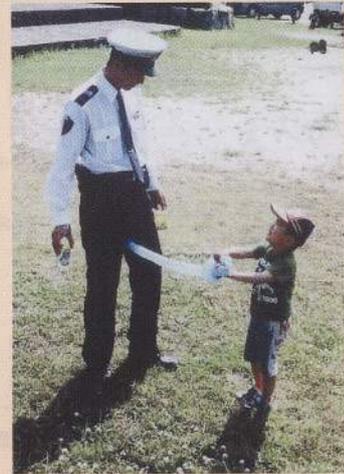
広瀬淡窓が少槩と再会したのは、弘化二年(二八四五)四月のことであつた。淡窓は六十四歳。大村藩主の招聘をうけて、日田を二月二十八日に出発し、大村に到着した三月三日から、ほぼ一カ月の間、君侯の前で講じ、藩費五教館で教えている。そこから再び長崎に遊び、かねてからの希望であつた唐蘭両館の外国人居留地の見学を果たすことができた。四月十九日、いったん長崎から大村に帰ってきた淡窓は、その日、そこから帰途についたが、唐津・博多を廻つて日田にむかうという迂回路をとっている。まず佐賀から多久に出て、聖廟に詣で、虹の松原に出て、前原経由で今宿にむかう。そこで医業を営んでいた亀井雷首夫妻と面会する。雷首の妻はもちろん、「九州第一の梅」と自称した少槩である。

そのときのことを、淡窓は『懐旧樓筆記』のなかでこう記している。

今宿に至る。亀井源吾(雷首)を訪う。其妻小琴も亦相見たり。二人は、三十七年前、予須恵より福岡に至り、昭陽先生を訪いし時、其の宅に相見たり。小琴名は友。予が筑に遊学せし時生まれ、今年四十八なり。源吾鬚髪皓然たり。小琴亦た老いたり。

この筆記は、淡窓がこの世を去る十一年前である。これが淡窓が少槩と会面した最後であり、生別離であつた。「小琴亦た老いたり」の語が印象的である。(了)

第11回能古の風フォトコンクール



博物館グランプリ入賞の「やさしいおまわりさん」。この作品は福岡県警の広報誌「暁鐘」に掲載された。

表彰式は平成20年12月7日、能古博物館内「海の部屋」で行われ、能古島グランプリの友野美保子さん(八女市)、博物館グランプリの八尋祥文さん(福岡市西区)ら8人の入賞者に賞状と賞金が贈られた。

入賞者は次の通り。(敬称略)

- ▽能古島グランプリ(賞金5万円)友野美保子(八女市)作品名「潮騒」▽博物館グランプリ(賞金5万円)八尋祥文(福岡市西区)「やさしいおまわりさん」▽特別賞(賞金2万円)高鷹るみ子(福岡市早良区)「コスモス背景に」▽入選(賞金1万円)中山隆史(福岡市南区)「釣り人」▽小山田公子(福岡市西区)「沖まで行きたいな」▽小川道博(福岡市博多区)「海辺のポスト」▽高鷹春一(福岡市早良区)「冬の日溜り」▽瀬野雄市(福岡市博多区)「能古の初秋」



博物館を訪れた「やさしいおまわりさん」のモデル能古駐在所の巡査部長吉田鉄平さん一家。

